お米の栽培ごよみ

育苗・田植え・田植え後の管理

種もみの更新

自家採種を続けると品種固有の特性が失われ、品種を特定できなくなる恐れがあり、収量・品質にも悪影響が考えられるので、種もみの更新をお願いします。

種子消毒

ばか苗病やイネシンガレセンチュウなどの予防のため、農薬を使用する場合は殺菌剤と殺虫剤を混合して使用します。浸漬処理の場合、処理薬液と種もみの容量比は1：1以上とし、もみ袋をよく揺すり中までしっかりと薬液に触れるようにして24時間浸けてください。

温湯消毒の場合は、60℃の温湯に10分間浸漬します。温湯消毒は農薬を使用しませんが、温度を一定に保たないと十分な防除効果が得られないため、できれば専用の機器を使用してください。また、もち米品種は温湯消毒で発芽率が低下することがあるため注意が必要です。

浸種

種もみに十分吸水させるため、10～15℃の水温で積算温度100度を目安に浸種を行います。10℃以下の低水温では催芽の遅延や発芽率の低下が起こる場合があるので注意してください。

浸種時の水量は、種子の2倍以上が基本です（種子1：水2）。種子消毒後の薬剤効果を安定させるため、浸け始めから3日間は水を替えないでください。その後は2～3日おきにこまめに水の交換を行ってください。

催芽

浸種が終わった種もみを水温30～32℃で約20時間もみの状態を確認しながら「ハト胸状態」に仕上げます。なお、外気温によっても催芽にかかる時間は変動します。芽や根が伸びすぎないように発芽状態を確認してください。

箱土

水田10a当たりに必要な苗箱数はおよそ20枚です。苗箱に入れる土は1箱に床土に約3ℓ、覆土に約1ℓが必要です。

種まき

1箱当たりの種もみの量は、催芽したもみで120～160gほどになります。種まきを始める前に、空いた苗箱などを利用して量を調節してください。

育苗

発芽時に光に当たっていない苗は白っぽい状態です。急に強い日光に当たると苗が傷むため、緑化期間の数日は被覆資材が必要です。

また、育苗期間はビニールハウスやビニールトンネルを使って保温を行いますが、温度が高いと苗が軟弱に徒長するため、出芽時は30℃、緑化時は25℃を越えないように温度管理を行います。また、育苗の後半は外気温に慣らし、がっちりとした強い苗に育てます。25～30日ほど育苗し葉齢が3葉～4葉になった頃に田植えを行います。

代かき

代かきは田面を平らにし、高低差3～4cm以内になるように仕上げます。また、環境保全のため代かき時の水量を少なめにした浅水代かきを行うことで、肥料成分や濁った水を多く川に流さないように工夫してください。

水持ちの良いほ場では、水を入れる前に土ができるだけ細かくなるように田面が乾いているときに耕起し、水を入れてから軽く代かきを行います。一方水持ちの悪いほ場では、田植えの3～7日前に荒代を行い水持ちを良くしてから代かきで田面の均平化を行ってください。なお、土を練りすぎると苗の活着や根張りが悪くなり、初期生育に影響が出ることがあるので注意してください。

田植え

できるだけ天気の良い日に田植えを行うと、活着がスムーズになります。深植えは、埋没による呼吸不足や地温の低さにより活着が遅れることがあります。

機械作業精度やほ場の状態、浮き苗の様子等を考慮して植え付け深さを調整してください。1株当たりの植え付け本数は3～4本にして、太い茎のがっちりとした稲づくりを目指してください。

薬剤の使用

水田で発生する主要病害のいもち病等や、虫害のイネミズゾウムシ、イネドロオイムシ等を防除する効果のある苗箱施用薬剤で予防的な防除に努めてください。

初中期一発処理の除草剤は雑草の葉齢等に注意して散布の適期を逃さないように注意してください。また、除草剤の効果は水管理に大きく左右されます。基本は水の出入りを止めて散布し、その後、約1週間は水深3～5cm（ジャンボ剤は5～6cm）を保つようにして、田面が露出しないようにしてください。

クログワイやオモダカ等、地中の塊茎から芽が出る雑草は、一発処理除草剤の効果が切れる頃からも発生するため防除が難しく、多発する場合は中後期剤が有効です。

なお、薬剤は種類により適用病害虫、適用雑草、使用方法や使用時期が異なりますので、使用前には必ずラベルを確認して適正に使用してください。

水管理

田植え直後から活着するまでは、夜間の低温から守るため「深水」で管理します。活着後は2～3cmの浅めの水管理で、できるだけ分げつを促すようにしてください。夜間や早朝に水を入れ、昼間は水を止めて水を温めるようにします。

なお、ジャンボタニシの食害がひどいほ場では、タニシの殻が見える程度の極浅水での管理を行うことで、被害を軽減することができます。

また、田植え以降の気象条件もよりますが、好天時には地温が20～30℃に達し、微生物の活力の活発化等により土壌の還元化が強まり「メタン」等のガスが発生します。必要に応じて夜間落水や早めの中干しを実施してガス抜きを行い、土壌への酸素を供給して根の健全化に努めてください。

ケイ酸加里の施用

水稲は、窒素・リン酸・加里の他に、ケイ酸を多く吸収します。ケイ酸は受光態勢を良くし、光合成能力を高めて登熟を良くするだけでなく、成熟期の茎葉中のケイ酸含量が高いほど乳心白粒が少なくなる傾向があります。

土づくり資材にケイ酸を含んだ資材を使用していない場合は、出穂前45～35日頃を目安に「ケイ酸加里」を10aあたり20～40kg施用してください。